

■ 報告 ■

私たちは高知県内でも土佐清水市という、高知市から120～130kmのところで活動しているのですが、主なメンバーは全て県外から来ており、その共通点は高知県が大好き、愛しているということです。愛しているのだけれど、少しもどかしさを感じているということも共通しており、地域のために活性化、それは経済的なことや人が多くなることなどありますが、幸福度を高めること、そもそも持っている力をもっと僕たちに見せて欲しいということをも動機で活動していることを前提で聞いていただけたらと思います。

中浜劇場《ちいき一日映画館》、これは中浜だけでやっているのではなく、高知県のあちこちでやろうと思っているのですが、一つの事例として聞いていただきたいです。“映画のロケ地”で共有する地域のアイデンティティで、中浜集落というところが土佐清水市にあり、現在257世帯、449人が住んでいます。江戸時代から鰹節産業で栄えた地域で、地域情報として2つの映画館が存在していました。そして、昭和29年「足摺岬」、昭和35年「雲がちぎれる時」の2本の映画が撮影されています。

「足摺岬」は戦前に書かれた小説です。土佐清水の町は昭和29年頃、漁港としてすごく発展しており、戦前と違う風景になった。足摺岬の先端の方は観光地化が進んで戦前の風景ではなかったというところで、舞台になっている訳ではない中浜が選ばれたということです。集落の人も2軒の映画館があって、2本の映画が撮られたことを僕らには言うんですが、あまりピンとこなかったもので、では、これを可視化して地域内外の人と共有できるようにしたいというのが事業の趣旨でした。

地域住民が出てきます。70年前で集落の面影は変わっているんですが、ご存命で会場に来る人はいるのかと思っていたら、結構来ました。「私が出ている」など、最初のイントロデュースの部分で盛り上がりました。

映画を観るだけでなく、実際に集落で撮影されたということ聞き取りをしながら、皆とロケ地をめぐるツアーを行いました。写真も出てきたのでパネルを作って皆で見て、ここがこうだったとゾロゾロ歩きながら見ていきました。

成果としては78名の来場者の内、集落から40人が来てくれましたし、自分たちの場所として自分たちの上映会にしてくれたと凄く感じました。パネルを見ながら地域ツアーをすると立体的に今でも何となく面影が見える、可視化が出来たかと思います。

今度は「雲がちぎれる時」上映してねと盛り上がったんですが、地域が主体になって開催するという気運には残念ながらなっていないかなと思います。高知新聞情報コーナー「こみゅっと」の告知を行ったことで、各地で上映して欲しいという声が寄せられていますので、続けていきたいと思っています。どうもありがとうございました。

■ 視察者からの意見・質問 ■

開場して15分でほぼ満席ということで非常に関心が高く、地域の方が楽しみにされていることが良く分かりました。今、映画館というものが高知に限らず全国各地で減ってきている一方で、小さな上映会など

頑張っているところもあると思います。清水ではニーズも大きいということでしたが、他の地域でもこのような上映会を清水サーバとしてはやっていかれるおつもりはあるのでしょうか。(事務局職員)

ー実施の前に高知新聞の情報コーナー「こみゅっと」に出したところで市外からの問い合わせが凄くありました。

安芸市でも映画館があったし古い映画を観たいとずっと思っていたけれど、なかなか機会がない。その人の家に行って、一緒に計画を練りつつ、そこにある映画館がまだ残っているとか、俳優の故川谷拓三さんが疎開していたとか、地域の情報が得られるので、やりたいなと思ってもいます。須崎では65歳以上のご夫婦で、デートの記憶を辿り2時間のドライブがすごく楽しかったということもあり、遠くでやるのも大事だなと少し思っています。

どう告知するかもあります。ターゲットを自分たちの地域内だけでなく高知全体に延ばしつつ、古い映画を見てあの頃を思い出したいという人たちに届けるためにやっていきたいと思っています。バスの時間に上映時間を設定するのですが、四万十市からバスで来られて、感動して帰って行かれ、その反応が自分たちの課題、やりたいことになっていきます。

■ 会場からの質問 ■

●この作品の上映の権利者は誰ですか。

ー配給会社があって、シネマ四国さんが手配してくださいました。これで、だいたい助成金の2/3を使うのですが、最初に上映しようとしていた「雲がちぎれる時」は生存者がいることが確実にわかっており、ロケした家もあるし、エピソードも多かったのですが、著作権というか、フィルムしかなく、DVD上映ができないため50万円ほどかかることがわかったので断念しました。